慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 国境を越える社会的福音 :<br>サミュエル・ガイ・インマンの宗教的パンアメリカニズム |
| Sub Title | Transnational social gospel : Samuel Guy Inman's religious Pan-Americanism |
| Author | 大久保, 教宏(Okubo, Norihiro) |
| Publisher | 慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会 |
| Publication year | 2002 |
| Jtitle | 慶應義塾大学日吉紀要. 人文科学 No.17 (2002. 5) ,p.59- 83 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | |
| Genre | Departmental Bulletin Paper |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10065043-20020531-0059 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 国境を越える社会的福音

## —サミュエル・ガイ・インマンの宗教的パンアメリカニズム—

大久保教宏

### はじめに—米国史を越える社会的福音

世俗社会の諸問題に教会も積極的な関心を示すべきと唱え，19世紀末から20世紀初頭にかけての米国キリスト教界における一大刷新運動となった社会的福音が，米国帝国主義，膨張主義を根拠づける理念を提供していったとする点は，日本においても曽根暁彦や森孝一により指摘されている。曽根も森も特に会衆派牧師ジョサイア・ストロングの教説に注目した。スペイン・カトリック文明とアングロサクソン・プロテスタント文明の対立，神意による後者の勝利というストロングの主張は，1898年米西戦争での米国勝利を説得的に正当化するものとして多くの米国人に受け入れられたという。(1)

だが，社会的福音の論者たちは単に米国膨張主義の理念提供者に留まっていたのではなく，自ら海外宣教にも赴き，アングロサクソン・プロテスタント文明拡張の試みを実地で展開していた。その身近な標的となったのが隣接する「カトリック文明の地」ラテンアメリカであった。だが，社会的福音がラテンアメリカへと及ぼした影響に関しては，米国史研究においてもラテンアメリカ史研究においてもほとんど問われてきていない。(2) そもそも，ラテンアメリカにおけるプロテスタンティズムの動向があまりにも看過されてきた。トランスナショナルなものであるはずの宗教も，ナショナリズムや文明論の展開において「国民化」，「文明化」され，「プロ

テスタンティズムは米国の宗教」,「ラテンアメリカはカトリック文明の地」といった固定観念が産出され，現在も我々南北アメリカ研究者の見方をもある程度規定していることは否めない。宗教，あるいは言語といった主に文化的要素によりアメリカはアングロ，ラテンと二つに識別されるが，国境の浸透性が問われる今日もなお，両アメリカの境界を越える文化的流れをスムーズに追えるほどには南北アメリカ研究間の浸透性は高まってきていない。米国教会内の運動とされる社会的福音の影響がラテンアメリカにいかに波及したかが問題とされてこなかったのも当然か。

そこで，本論ではストロングに共鳴した社会的福音の論者の一人であり，実際にラテンアメリカ宣教の第一線で活躍した宣教師サミュエル・ガイ・インマン（Samuel Guy Inman，1877–1965）の思想，活動を取り上げつつ，米国社会的福音がラテンアメリカへと影響を及ぼす経緯，背景の一端を解明する。米国政府主導の政治的パンアメリカニズムが推進されたこの時代，インマンらが唱えるいわば宗教的パンアメリカニズム（インマン自身はラテンアメリカで警戒される「宗教」,「パンアメリカ」といった語よりも,「文化」,「インターアメリカ」を好んで用いたが）も政治的パンアメリカニズムに追随しつつ力を得ていったのであり，当時のラテンアメリカにおいて時にプロテスタンティズムが「米国帝国主義の先兵」として糾弾されたのもゆえなきことではない。しかし，このような画一化されたプロテスタンティズム像のゆえに見落とされがちな点は，プロテスタンティズムの利害は必ずしも米国政府の利害とは一致していなかったこと，さらに重要なことは，インマンの思想，試みに同調するラテンアメリカの為政者，知識人も少なからずいたことである。超大国へと成長を開始し，頻繁に政治的干渉の機会を窺う米国の文化，特に宗教に対してラテンアメリカ人が抱いてきた警戒心や反感は強く，それゆえ，ラテンアメリカにおいてプロテスタント宣教は苦戦を強いられてきたのだが，米国に対するラテンアメリカ側からの思いは，警戒心や反感だけではなく憧憬もあった。政治，経済，社会，文化等々，様々な領域において米国はラテンアメリカ

にとってのモデルであり，ラテンアメリカの為政者，知識人たちはそれを積極的に模倣，学習しようとした。

宗教とてその例外ではない。次第に激化するカトリック教会と国家の対立に倦み，カトリシズムに代わる国民統合の原理を模索していたラテンアメリカの為政者，知識人にとって宗教は大問題であり，政教関係の調和を特徴とする米国宗教のあり方は，彼らに新しい宗教的国民統合のパラダイムを提示するものであった。そこで，このような彼らの必要を知ったインマンは米国宗教のあり方をモデルにした新しい宗教による南北アメリカの一体化を唱え，それに多くのラテンアメリカの為政者，知識人も呼応していった。宗教的パンアメリカニズムは単に米国人プロテスタント宣教師による一方的な文明拡張の問題として処理することはできない。

この米国宗教のあり方は市民宗教（civil religion）として今日知られている。米国にその典型があるとされる市民宗教がラテンアメリカにいかなる影響を与えたかについてもこれまでほとんど明らかにされていないが，(3) 実はラテンアメリカ諸国の為政者，知識人にとって米国をモデルとした市民宗教は国民統合の手段として有力な選択肢となっていた。本論では，米国社会的福音に発し，国民統合が推進された時代のラテンアメリカの必要に応じて受け入れられていった市民宗教という「パンアメリカ」な宗教思想的流れについて，その送り手側の一人とも言える米国人プロテスタント宣教師インマンの思想，活動に着目しつつ解明してみたい。

## 1.　市民宗教という選択肢

市民宗教とは18世紀フランスの思想家ルソーが『社会契約論』第4編第8章「市民宗教について」において展開した議論に由来し，米国の宗教社会学者ベラーが米国の事例に依拠して本格的に紹介した概念である。ルソーもベラーもキリスト教の出現が政治と宗教との分化，対立を惹起したと捉える。その上で，近代における政教対立の一つの解決方法を，ベラーは米国の市民宗教に見出すのである。ベラーはワシントン，リンカーン，

ケネディら歴代大統領の演説中に「神」という言葉が繰り返される点に注目した。たとえば，ケネディの大統領就任演説は次のような言葉で結ばれているという。

> さあ，神の祝福，神の助けを願い，しかし，この地上における神の御業はまさに我々がなすべきことであるとの認識を抱きつつ，我らが愛する国を導くために前進しようではないか。(4)

しかし，ケネディはこの演説において，「いずれかの特定の宗教に言及したのではなかった。[…] 実際，彼が言及したのは神の概念だけであった」。こうして，いかなる宗教の信者も大統領が語る「神」を米国の共通の神として受け入れ，結集することが理論上可能になる。では，米国の支配的宗教であるキリスト教と米国市民宗教との関係はどのようなものであるかというと，市民宗教は「キリスト教に対立するものではなく，実際にはキリスト教と多くのものを共有しているのだが，特定の教派に関わるものでも，あるいはいかなる意味においてもキリスト教そのものでもなかった」。(5)

ベラーの議論において注目すべきは，市民宗教が米国の具体的な歴史的試練を通して鍛えられてきたとする点である。(6) 第一の試練は独立であり，ワシントン，ジェファーソンら建国の父たちが「神」に訴えかけつつ，米国が自立して共和国を建設しうるかを問うた。第二の試練は南北戦争であり，このとき登場したリンカーンは建国の父たちの言葉を継承し，戦争や奴隷制といった問題の解決を宗教的言辞において表現した。これらの試練を通し，市民宗教は米国がたどってきた歴史，課せられた使命を神意によるものと説明しつつ，米国ナショナリズムと分かち難く結びついていく。ワシントン，リンカーンらを「聖人」に，独立宣言やゲティスバーグ演説を「聖典」と捉え，「聖人」の誕生日や命日，独立記念日などを「聖日」として祝うことで，米国の市民宗教は「宗教的象徴と実践のセッ

ト」[7] を備え，制度化された宗教としての体裁を整えていった。このように，米国の市民宗教は「教会とのいかなる激しい闘争を交えることなくして，国民的連帯の強力な象徴を築き上げ，国民的目標の達成に向かうよう根底から個々人を動機づけることを可能にした」。[8] 米国歴代大統領もインマンも市民宗教という言葉こそ用いてはいないが，政治と宗教の関係を調停し，国民に神的な目的や使命を課しつつ，国民的一体化を促す特殊な宗教が存在しうることを彼らは認識していた。

だが，その後ベラーは市民宗教に関する発言を活発化させていない。この点についてホセ・カサノーバは「ベラーがこの議論を展開した時，すでに市民宗教に由来するいかなるものも重要性を失いつつあった」[9] と述べている。現在でも米国の貨幣には「我らは神を信じる」（In God We Trust）と記されていることや，公的誓約において聖書に手を置くといったことなどが市民宗教という概念によってうまく説明できようが，それらが米国プロテスタント中間層の習慣やWASP的伝統に順応するものであったとしても，そのような習慣，伝統を共有しえない多様な社会勢力の存在が時代とともに顕在化してきた。米国においても国民統合を促す市民宗教の実際的効力が衰えつつあるとは言えないだろうか。[10]

だが，たとえ米国市民宗教の効力が衰えつつあるとしても，市民宗教の創造が試みられてきたという歴史までをも見落としてしまうわけにはいかない。市民宗教が米国の政治指導者によって巧妙な国民統合の手段となり，しかもそれに効果ありと思われていた時代が確かにあった。そのことは教会・国家の対立と国民統合の問題に悩む20世紀初頭のラテンアメリカ知識人にも実はよく知られたことであり，彼らは米国の方法を積極的に学ぼうとしていた。彼らは市民宗教という選択肢を選ぼうとしていたのである。その結果，インマンらプロテスタント宣教師たちが市民宗教の専門家としてラテンアメリカの為政者や知識人に働きかけていく余地も生じたのだ。

## 2. メキシコ宣教へ

インマンは1877年，テキサス州トリニティに近い農場で生まれた。その40年前まではメキシコ領であり，なお多数のスペイン語話者が住んでいたテキサスは米国にとっていわば文明的係争地であり，早急なアングロサクソン化，プロテスタント化が求められた。実際，多くのプロテスタント教派がテキサスの諸都市で活動を始めていた。後にテキサスの諸都市がラテンアメリカ宣教の一大拠点となっていったのは，テキサス入りした多くの教派がメキシコ人との実際的接触によって早くから国境の南側への関心を高めていたからでもあろう。

インマンの生涯に関してはウッズによる伝記的研究に詳しいが，それによれば，テキサス生まれのインマンにとって，メキシコ人とプロテスタンティズムの存在は幼少時から馴染みの深いものであった。しかし，当初これらに対してインマンは全く正反対の態度を取った。メキシコ人，そして黒人に対して恐らく当時の多くの米国人が持っていたであろう人種的偏見をインマンもまた持っていた。これに対し，インマンは幼少時に両親を亡くしたせいもあってか，宗教への関心は大きかった。トリニティではメソジスト教会に通っていたが，ヒューストンで行われた大衆伝道者サミュエル・ポーター・ジョーンズのリバイバル集会に参加し，その自由な発想に感銘を受け，メソジスト教会を出てディサイプルズ教会の小さな会衆に加わり，社会活動に熱心な超教派のキリスト共励会の活動にも参加した。メキシコ人地区での礼拝にも協力するようになり，次第にインマンの偏見も消えていったという。1897年にアドラン・カレッジ（後のテキサス・キリスト教大学），1899年にはケンタッキー州のトランシルヴァニア大学に入った。1901年にはニューヨークに移り，コロンビア大学で学ぶとともに，第一ディサイプルズ教会の牧師補助を務めた。1904年，再びテキサスに戻り，フォートワースの幕屋教会の牧師となった。この教会での8か月間の司牧活動において説教のみの活動に疑問を感じた彼は，ディサイプ

ルズ教会キリスト教婦人宣教会の要請を受け，メキシコ北部第一の都市であるヌエボレオン州の州都モンテレイでの宣教を決心した。こうして，1905年6月，インマンは革命勃発を5年後に控えたメキシコでの宣教活動を開始したのである。(11)

メキシコでの活動を始めたインマンは，教育と礼拝が同じ場所で行われていることに疑念を感じた。多くのメキシコ人はプロテスタンティズムの宗教活動を警戒し，プロテスタント学校に子供を送ろうとしないのである。彼は宣教地を抜け出してアパートを借り，そこに自分の蔵書を置いて誰でも見ることのできる図書館とした。宗教色のない，世俗的社会活動のための場所を作ろうとしたのである。1908年，宣教会の要請で彼はヌエボレオン州の西に隣接するコアウイラ州のピエドラスネグラスへと活動の場を移した。ここでも彼は一室を借りて図書館を作り，さらには英語や音楽の授業を行い，社会問題に関する討論会を開いた。彼はそこを「民衆会館」(Instituto del Pueblo) と名付けた。(12) 事実上の私立学校へと発展した民衆会館は，教育の整備を推進していたコアウイラ州政府の目に留まり，当時同州知事であった後の革命指導者ベヌスティアーノ・カランサも民衆会館を訪問するなど，好意的な態度を示している。その斬新な教育活動はカランサ以外の革命家の関心も呼び，インマン自身が記しているところによれば，革命を成就させたフランシスコ・マデーロは民衆会館から新政府の公職に就く者を募ったという。(13)

世俗的作業に専心する民衆会館は当初宣教会の理解を得られにくかったようだ。だが，インマンの本心は宣教にあり，彼は従来の宣教方法ではラテンアメリカ人の警戒心を呼ぶだけだと考えた。彼はテキサスやニューヨークで社会的福音の方法を知っていた。キリスト教と共和制を重視するストロングらの意見に賛同していた。(14) 民主主義に依拠した共和制を支えるのは自由，平等といった理念であり，これらの理念を実現化する教育，道徳，実践を重視する。問題の分析や解決にあたって科学に訴えることも厭わない。社会的福音を奉じる者たちはこのような一見世俗的な価

値，概念を掲げ，それを実現するための世俗的社会問題の解決に奔走したが，本音はあくまでも宣教にあった。米国の社会的福音で生じた世俗的問題への関心は，インマンらによって世俗性を装った宣教戦略へと発展し，プロテスタンティズムによるラテンアメリカ宣教の基本方針となっていく。それが先駆的に具現化されたのが民衆会館であった。

## 3. 宗教的パンアメリカニズムを説く

民衆会館が建てられ，メキシコ革命が勃発した1910年は，英国エディンバラでプロテスタント世界宣教会議が開かれた年でもあった。インマンもディサイプルズ教会婦人宣教会の代表として，世界各地から集まった1355人に及ぶ出席者のうちの一人としてこの会議に参加している。「20世紀エキュメニカル運動の幕開け」[15]と位置づけられるこの会議において，インマンは超教派による宣教活動の重要性を知るのである。

だが，ヨーロッパの代表が主導権を握っていたこの会議において，ラテンアメリカはすでにキリスト教化しており，プロテスタンティズムが活動すべき地として認められなかったことは，アメリカ各派にとって大いに不満であった。そこで，インマンらが中心となり，ラテンアメリカ宣教の教派間協力を目指した会議の開催を決定した。1913年3月にその準備会議としてニューヨークで開かれた北米海外宣教会議において，超教派宣教の調整組織としてラテンアメリカ協力委員会が組織され，インマンがその長に任命された。翌年，同委員会はメキシコでの教派間協力に関してオハイオ州シンシナティで会議を開催した後，いよいよ南北アメリカ全域を対象とした宣教会議を開くこととした。開催地はパナマ運河地帯が選ばれた。パナマは南北アメリカの架け橋，アメリカの地理的中心地として象徴的な意味を持つだけでなく，1914年にパナマ運河が開通したばかりであり，世界の目をアメリカに向けるには格好の地であった。また，1903年のパナマ独立以来，運河地帯は実質的米国領であって，プロテスタンティズムの活動も比較的自由であった。こうして運河地帯において1916年2月，

ラテンアメリカ・キリスト教活動会議が開かれたのである。この会議を主導したのはインマンをはじめとする社会的福音の論者たちであった。これは米国においてはすでに退潮気味であった社会的福音のフロンティアをラテンアメリカへと求める最初の体系的試みでもあった。以後，大陸規模での協力はアメリカ各国のプロテスタント諸教派が目指すべき重要な方向性の一つとなった。その後，同様の会議は南アメリカ大陸を対象にしたものが1925年にウルグアイのモンテビデオで，中央アメリカ，カリブ海地域，メキシコを対象にしたものが1929年にキューバのハバナで開かれている。ラテンアメリカ宣教においては1920年代以降も社会的福音は影響力を維持し続けたのである。

だが，大陸規模での協力というと米国主導の政治的パンアメリカニズムを想起させ，さらには米国によるラテンアメリカ支配の象徴とも言えるパナマ運河地帯で会議が行われたのでは，プロテスタンティズムが米国の政治的拡張に加担する先兵と解釈されても仕方がない。このことを認識していたインマンは，各国が対等に，しかも政治的にではなく文化的に一体化するべきことを強調し，米国の膨張主義政策をラテンアメリカにおけるプロテスタント宣教の障害として厳しく非難した。彼の最初の主著『メキシコ干渉』が1919年にニューヨークから出されたのはこのような文脈上でのことであった。

革命の混乱に乗じて米国は度々メキシコに干渉した。1914年，米海兵がメキシコ兵によって逮捕された事件をきっかけに，米国はメキシコ湾岸の中心都市ベラクルスを占領した。間もなくベラクルスは解放されたものの，メキシコ人革命家パンチョ・ビジャによる領土侵犯，1917年革命憲法の地下資源国有化規定や宗教の自由を制限する条項などを口実に，米国ではメキシコに政治的，軍事的干渉をするべきとの世論が再三高まった。

これに対し，インマンは多くの米国人がメキシコ干渉を求めるのはメキシコに関する無知によるものであるとした。彼が指摘した米国人の無知の原因とは，①メキシコの地理，歴史についての無知，②メキシコの国内政

治動向についての無知，③アングロサクソン人とラテン人の心理的相違についての無知，④米国人がメキシコの問題を米国の政治的，経済的問題と切り離して考えられないこと，⑤米国人が虚偽の報道によりメキシコの真の状態について知らされていないこと，であるという。(16) これらの無知を克服し，メキシコに関する正確な知識を米国人に与えるために，彼は『メキシコ干渉』を書いたという。その内容を見てみると，第1章「問題の諸側面」においてこれらの無知の諸原因を解説した後，第2章「現在のメキシコの騒乱は真実の革命か」，第3章「カランサはどのような人物か」，第4章「メキシコ人は米国人をどのように考えているか」，第5章「メキシコの現状」，第6章「米墨関係の未来」において，様々な角度からメキシコの状況を説明する。各章表題や『メキシコ干渉』という書名を見る限り，この書はメキシコを巡る政治状況紹介の書と思われよう。だが，インマンの強調点は，メキシコは革命により米国のような民主主義共和国体制を築こうとしているのだから，米国はそれに対して政治的，軍事的干渉を行うのではなく，文化や教育における協力をなすべきだ，ということである。インマンはアメリカ大陸の文化的一体化を求めたのである。

インマンが唱えるこの文化的一体化とは多分に宗教的一体化であった。彼はアルゼンチンの作家ホセ・マルモルの1852年の代表作『アマリア』(*Amalia*) の一節を引き，「我らの祖国社会を組織化する明日の協力，祖国に自由と法を与えるための政治における協力，祖国に学と進歩を与えるための商業，工業，文学，科学における協力，我々が有していない道徳，美徳を養うための宗教における協力」が必要なのだと説く。(17)

1923年，チリのサンティアゴで開かれた第5回パンアメリカ会議において，依然として米国一国が優位に立ったアメリカの政治的一体化が推進されているのを受けて，インマンは1924年にスペイン語で『アメリカの連帯に向けて』，(18) 1926年には英語で『パンアメリカニズムの諸問題』を著し，文化的一体化の重要性をさらに説いているが，特に1925年にモンテビデオで開かれた南米キリスト教活動会議を経た後に出された後者にお

いては明確に宗教問題が扱われている。すなわち，第2章「ラテンアメリカの諸問題」の中で「宗教問題」を一つの項目として取り上げている。

> スペイン系アメリカを訪れる者は誰しも，これらの国に宗教が欠如していると知るだろう。以前はキリスト教に対するこのような無関心や反感は教養ある階級の人々においてのみ見られることであった。今では教養ある女性，さらには都市の労働者階級にもこれは広まっている。(19)

「宗教の欠如」という表現によって彼が言おうとしていることは，カトリシズムが宗教としての機能を果たしていないとすることである。この点をさらに敷衍するために，インマンはペルーの作家フランシスコ・ガルシーア・カルデロンの1913年の著『ラテンアメリカ，その上昇と進歩』(*Latin America, Its Rise and Progress*) から引用する。

> 我々はラテンアメリカに洗練された懐疑論も，厳格な宗教も，スペインにおけるような神秘主義も見出せない。ラテンアメリカのカトリシズムは公的な次元での宗教でしかなく，その底の浅さは明らかだ。我々は伝統的宗教の堕落をまさに目の当たりにしている。教会は官僚組織と化している。修道院は下層階級の者を引き寄せるだけだ。米国では聖書的人間の力となっている創造性ある信念の強さ，人間の運命への深い関心，厳格な義務感，人生の深刻さの理解，これらのものにラテンアメリカの淫らで無気力なカトリシズムは何ら関心を示さない…。政治的，経済的次元においては，我々の宗教的無関心は優柔不断，思索への嫌悪感，非道徳の原因となっている…。これらの国々には信条が欠けている。その古い時代の生活は厳しい宗教と結びついていた。道徳的文化のない民主主義体制においてさらにカトリシズムも駄目だというのなら，野蛮へと回帰するしかない…。米国ではピュー

リタニズムが金権政治的な非道徳に対する恒常的な防護壁となっている。ラテンの南では新しく深い信仰だけが蓄積された富に国民的感覚を与えることができるはずだ。(20)

さらにパラグアイの作家カルドゥス・ウエルタの『鋤とペンと剣』(*Arado, pluma y espada*) からも引用する。

スペイン系アメリカと米国とで果たされている宗教の役割が何と異なることか。聖職者がインディオに洗礼の秘蹟を授けることをむやみに急いだ征服期から現在に至るまで，宗教は教会堂と会衆の外ではその高貴な使命を十分に果たしてこなかった。宗教が政治に関わってきたことは国に多くの弊害をもたらした。聖職者は讃美の心を失い，大衆の懐疑心を呼び，まだ若い社会，政府に対して重大な害悪をなした。このような聖職者の行為，宣伝に国は苦しんできたのである。カトリック教会の多くの敬うべき愛国的行為や教育活動を指摘するのは簡単だろうが，道徳的存在として教会は政府の物質主義精神を妨げることはできなかった。教会もまた物質主義精神にあまりに深く染まっていたのである。[…] 宗教的力がこれらの国々の発展を助ける効力を発揮していない。政治的党派心を鎮めるどころか，それらを不寛容と排他性へと焚きつけている。米国におけるように，あるいは心理学者が考えるように，もし宗教が人間集団を国民へと変化させる強大な力であるなら，スペイン系アメリカ諸国においても宗教は大きな役割を果たすはずだ。(21)

ウエルタからの引用を通してインマンが語ろうとしていることは，物質主義の潮流を阻止するのにカトリシズムはその役割を果たしていないので，その代わりとなる宗教が必要だということだ。そのモデルは米国にあり，そのような宗教を通して国民形成もなされるという。このことは，続

けて記されているインマン自身の言葉にも明確に示されている。

> 大規模な宗教改革が南アメリカでは大いに必要とされている。最も先鋭な批判者たち（南アメリカの出身者も含まれるのだが）は，堅実に発展した道徳感覚が欠如していることが，南アメリカを世界の指導権，世界への奉仕という輝かしい将来から遠ざけている要因であると考えている。[…] 霊的になった教会が人々に，より明確な義務と権利の感覚と，この感覚が彼らの生活を治めるための大きな刺激を確かに提供するのである。だから，これらの南の国々にとって，真の民主主義，近代科学の知識と両立しうる宗教を見出すことが残された作業である。このような宗教は同時に個人的，国民的特性を作り出し，それなくしては恒常的な文化的建造物はいかなるものも建設しえないような霊的理想を提供する。(22)

ここで注目すべきは，「霊」（spirit, espíritu）という言葉をインマンが繰り返し用いている点である。南北アメリカ各地において実証主義，社会主義といった合理論的，唯物論的思想が台頭し，宗教的価値は著しく危機に瀕していた。民主主義や科学も宗教とは無関係，あるいは対立するものとして捉えられるようになった。このような趨勢に対抗すべき制度的教会も堕落している。このように捉えたインマンは，宗教的価値の再興を目指すには霊の力を復権させねばならないと考えた。この霊とはもちろんキリスト教に由来する概念であるから，インマンに限らずキリスト教徒が社会問題を語る際に霊に言及するのは不思議なことではない。キリスト教徒にとって，霊が伴って初めて民主主義も科学も意味をなし，個人も国民も正しい特性を持つのだ。しかし，霊の強調を単にキリスト教に普遍的な現象とするのではなく，制度的教会への信頼が失墜し，それに代わるものとして霊が強調されている点を見落としてはならない。ガルシーア・カルデロンやウエルタからの引用でもまず明らかにされているのは，ラテンアメリ

カにおけるカトリック教会がすでに有効な宗教制度として機能していないことである。これは当時の多くのラテンアメリカ知識人に共有された見方であった。彼らは「公的宗教」でしかないカトリック教会に見切りを付けている。とはいえ，プロテスタンティズムに対する警戒心も依然として強い。だが，このことだけから彼らの態度を反宗教的とするのは早急である。もちろん，マルクス主義のような反宗教的思想に走る者も多かったであろう。だが，社会建設，国民統合をいかに進めるかが緊急の課題であったこの時代，それらの基盤となるべきものとして宗教を掲げることも世界的思潮の一つであった。そのように考える人々の強調点は教会組織ではなく霊に置かれるのである。カトリック教会に対して肯定的か否かだけではなく，霊を語るか否かもこの時代のラテンアメリカ知識人の宗教に関する態度を見極める指標である。インマン自身，教会への信用を失ったがゆえに霊の重要性を唱える知識人がラテンアメリカの一つの勢力となっていることを見抜いていた。

> 新しい霊的運動もまた顕著になっている。これらの国々では独立当初，教会と国家の一体化が認められていた。しかし，公教育が普及し，支配者階級が説く民主的思想に対して公的教会が敵意を抱いたがゆえに，多くの知識人が教会から離れ，しばしば宗教全般への明らかな反対者となっていった。数年前までは南アメリカの指導者たちは宗教が生活においてほとんど役割を果たさないと説く物質主義的思想へとアメリカ大陸を導いていたようだったが，現在では明らかに霊的問題への関心が復興している。政府役人，大学学長，著述家，著名なジャーナリストなど，偉大な指導者の多くは今では国民的，あるいは個人的生活において霊的基盤を見出す必要を盛んに唱えている。これらの新しい社会的，霊的力はアメリカ間協力により大きな機会を与えている。(23)

さらにインマンは霊を基盤とした社会観，世界観普及のためにプロテスタンティズムが果たす役割の大きさを説こうとするが，ここでもラテンアメリカ人の言葉を引用している。アルゼンチンの教育思想家アグスティン・アルバレスは『我々はどこへ行くのか』（*¿A dónde vamos?*）において次のように記しているという。

> だから，自由主義的プロテスタンティズムは人類が世俗的進歩へと最大限向かうように導きながら，より有用な手段を用いて自然を支配し，土地を開発しながら全ての大陸へと広がっていった植民者の人種を作り出した。他方，カトリシズムは世俗的科学を排斥し，公的儀礼に囚われて，人間から良質のエネルギーを抜き取り，農業，商業，工業における新しい手段，個人的清潔さと公的健全さ，この世の正義と市民的道徳から人間を遠ざけた。[…] こうして，偏狭で迷信的なカトリシズムは科学の敵となり，信者の無知を良いことに，彼らにドグマティックな不寛容や霊的奴隷状態において教育を施すことで，自己統治する能力を有した精神の発展を抑制した。[…] これに対し，自由主義的プロテスタンティズムは行為において寛容な自己統治の精神を養う。なぜなら，思想における寛容に向かうように教育するからである。(24)

さらに，チリの大統領アルトゥーロ・アレサンドリがプロテスタントたちから聖書を贈られた際に語った言葉をインマンは引用する。

> 私はキリスト者であり，キリストの教えを信じ，聖書の健全な教義を受け入れるが，ローマ・カトリック教会の誤りは拒否する。[…] 私は貴君らプロテスタントが諸国でなしている文化的，道徳的活動を知っており，それに最大の敬意を払っている。(25)

アレサンドリの言葉に典型的に示されているように，ラテンアメリカの知識人，為政者がプロテスタンティズムに望んでいることは，宗教的活動よりも「文化的，道徳的活動」なのである。まずはこの要望に応えることが必要なのであり，宣教を前面に押し出した従来のやり方を変えなければならないというのがインマンの考えである。そのためには従来のプロテスタンティズムは変わるべきであるとする。

> スペイン系アメリカに活力ある宗教を，という問題は，ニューイングランドの冷淡なプロテスタンティズムや偏狭であの世的カトリシズムへの隷従からは恐らく解決されない。プロテスタンティズムはこれらの国々での活動を始めて以来，僅かの間にカトリック教会を自由化する影響力を行使してきた。他方，プロテスタンティズムも［…］ラテンの温和で同情的な気質によって変えられ，それほど厳格ではない信仰へと変わった。これらキリスト教の二派が互いに作用し合えば，人々にとって良い結果をもたらすことは間違いない。この両者が倒れれば，さらに悲しむべきことに人々は真の霊の賜物を完全に失うことになろう。(26)

インマンの少なくとも当面の目的は，ラテンアメリカをプロテスタント化することではなく，ラテンアメリカに「活力ある宗教」を与え，霊に基盤を置いた社会を形成することであった。霊のような一般的抽象的概念の強調は，特定の宗教，教派に偏らない宗教概念を導き出す作用を果たしている。それがラテンアメリカ社会連帯の絆となるという。この点については，ウルグアイのアベル・ペレスの著『アメリカ』（*América*）の言葉を借りる。

> 健全であると同時に美しくもある高度な文化をアメリカ諸国の市民に与える作用を果たしうるもう一つの要素がある。それは気高く常に道

> 徳的な理想も与え，集団的存在がまさに追求すべき目標である連帯をも可能にするだろう。その要素とはすなわち，ある種の宗教的信条の存在である。それはその聖域においてありとあらゆる至高の希望を保持するほどに純粋であり，あらゆる信条を包み込むほどに懐が深く，全ての信仰者が祈りを合わせられるほどに寛容である。(27)

ここで言う「ある種の宗教的信条」とはカトリシズムでもプロテスタンティズムでもない。これら既存の宗教ではなく，南北アメリカ諸国の一体化を実現する新しい宗教を求めようというのがインマンの主張なのである。彼はアメリカ各地にこの新しい宗教を広め，それによってアメリカの宗教的一体化を進めようとした。だが，インマンは自ら市民宗教に関して活発に発言するのではなく，ラテンアメリカの政治家，知識人たちの意見を前面に押し出そうとする。米国人プロテスタント宣教師としてのインマンの意見ではなく，ラテンアメリカ人が語る議論であるという点に説得性を見出そうとしているのである。また，ラテンアメリカで霊を語る人々を結集し，カトリック教会と物質主義に対抗する一大勢力を築こうともしている。そこで，この目的をより効果的に達成するために，アメリカ各地の為政者，知識人，科学者が宗教に関する自らの意見を表明できる場を設けた。それが雑誌『新しい民主主義』（*La Nueva Democracia*）であった。

## 4. 『新しい民主主義』の刊行

『新しい民主主義』はラテンアメリカ協力委員会の機関誌として，1920年1月，月刊誌として創刊された。編集長を務めるのはインマン自身である。出版地はラテンアメリカ協力委員会の本部があるニューヨークであるが，ごく一部の英語記事を除きほぼ全てスペイン語記事であり，読者として想定しているのが専らラテンアメリカ人であることがわかる。創刊号の巻頭記事にはこの雑誌を出す意義が説かれているが，ここにはインマンの考えがいくつか読み取れる。

> 我々の主要な目的は何か。ある部分潜在化したアメリカ大陸の理想が公の形で外に現れ，具体化されるための公的な論壇としての役割をこの雑誌が果たすこと。これは全て，ラテンアメリカ文明がアングロサクソン文明に従属することや，あるいはその逆の従属関係を求めてのことではなく，その反対に両文明が互いに影響を及ぼし合うことでいかに完全なものとなっていくかを示すことを目指している。(28)

インマンにとって南北アメリカの一体化は政治的問題ではなく「文明」の問題であった。文明を持ち出すことで「アメリカ大陸の理想」である文化や宗教による一体化を説くことができる。一体化したアメリカは文明としての使命を担うのである。

> 両文明とも，全くの廃虚と化す危機にある破綻したヨーロッパに霊的，社会的，芸術的，経済的支援を送るよう努めている。[…] 現在人類は未曾有の危機にある。これらの深刻な問題の解決はアメリカにかかっている。[…] アメリカ大陸は今を生きる人類に対し特別な使命を帯びている。それは人類があらゆる問題を解決できるよう助けるという使命である。(29)

『新しい民主主義』創刊当初の各号表紙には南北アメリカの地図が描かれ，その上下左右を囲むように，コロンブス，ボリーバル，サン・マルティン，ワシントンの肖像が配されている。後三者は南北アメリカ諸国の「独立の英雄」であり，これらを並置することで南北アメリカの対等さを示し，アメリカ共通の「始祖」であるコロンブスを上部に配置することでその一体性を表そうとしていると考えられる。さらに，この表紙にはもう一つ別の点が読み取れる。ワシントンは「神意」である米国独立を勝ち取り，米国が担うべき「使命」を示し，その発言は米国人にとっての「預

言」で満ちている。ワシントンは米国市民宗教の「聖人」の一人に祭り上げられているのだ。同様の祭り上げをコロンブス，ボリーバル，サン・マルティンについても行い，南北アメリカが共通して奉じることができる大陸規模での市民宗教のパンテオンを作ろうというのが，この雑誌が目指す点の一つであった。(30)

『新しい民主主義』は当初，「社会と道徳」，「科学と発明」，「芸術と教育」，「世界の情勢」といったセクションに分かれていた。これらを見る限り，この雑誌は宗教団体が出しているとは思えない文化学術情報誌との印象も受けるが，実はそうではない。「あらゆる人間の基本的問題には，その根底を探れば宗教が関わっているので，第一のセクションには常に宗教に関する記事が載るであろう」(31) と述べられている通り，「社会と道徳」には多くの宗教関連の記事が並んでいる。創刊当初は特に超教派運動（エキュメニズム）に関する記事が多い。超教派運動は独立した個々の教派性を相対化して共通の宗教を求めようとするプロテスタント的市民宗教と軌を一にする動きでもある。このような動きを紹介しながら，インマンはラテンアメリカの知識人に米国をモデルとした宗教のあり方，さらにはそれを実現しているプロテスタンティズムの力を暗に訴えかけようとしていると考えられる。

では，このセクションをなぜ「宗教」とせずに「社会と道徳」としたのか。それはカトリシズム，プロテスタンティズムという既存の宗教に対してラテンアメリカの為政者，知識人が抱く疑念を考慮し，宗教を前面に押し出すことは得策ではないと考えたからである。

> 宗教を信じない者，あるいは宗教が一般的原理，基本的思想，人間的感情であるよりも，厳格なドグマ，機械的儀礼，仰々しい儀式の総体で，寺院，教会堂，大聖堂であったり，聖職者，牧師，司教，神父による組織としてしか捉えられない読者は尻込みしなくてもよい。(32)

創刊号巻頭の記事はこのように説きながら，宗教への警戒を解こうとしている。そして，信頼すべき宗教はやはりキリスト教なのであるが，それは国家と対立するカトリシズムや米国膨張主義の先兵としてのプロテスタンティズムではなく，社会的な機能を持ったキリスト教であると強調し，この抽象化されたキリスト教に依拠した市民宗教を構築しようとする。

> 我々が語ろうとしている宗教はゴルゴタの殉教者キリスト・イエスの純粋で素朴な宗教である。[…] この宗教は誠実に正しく解釈すれば，現在のあらゆる問題への解決となる。キリスト教の社会的側面について語ってみよう。[…] 権利と義務，権威と服従，社会的正義と富の分配に関する正義，人間性と家庭，個人の自由と労働についてキリスト教が持っている至高の概念なくして社会は発展しえない。(33)

ところで，この雑誌の題名『新しい民主主義』は何を意味するのか。創刊号巻頭記事には次のように書かれている。

> 出版物というものは集団の思考，共通した感情を形作ってきた。[…] それは新しい民主主義の希望，未来である。出版物を通してのみ，社会正義が得られ，全ての社会階級間の友愛的調和が確立される。(34)

インマンにとって民主主義は単なる政治体制ではなく，成員が互いに調和を保ちながら，思考，感情を共有する社会状態のことである。その思考，感情は宗教や霊に基盤を置くものである。「我々は出版物が果たす文明化の使命を熱烈に信じている」(35) というのが創刊号巻頭記事の冒頭の一文であるが，インマンは『新しい民主主義』を，ニューヨークから発してラテンアメリカ諸国へと民主主義を広めるという「文明化の使命」を託された雑誌として位置づけている。

当時のラテンアメリカの為政者，知識人にとって，民主主義は否定できない近代社会の「普遍的原理」であった。よって，民主主義という言葉を雑誌名に用いることは，ラテンアメリカに対して説得的にアピールしつつ，普遍性を装った米国文化の輸出を正当化した。米国のプロテスタントたちにとって民主主義とは宗教的な理想の状態であった。自由や平等にしても，彼らにとってそれは「神から与えられた自由」であり，「神の下での平等」なのである。自由，平等，民主主義と言っても，言葉の上では必ずしも宗教に直結するものではない。しかし，彼らは表面上世俗的な響きを持つこれらの言葉に込められた宗教性を輸出しようとしている。このように考えると，『新しい民主主義』という雑誌名がいかに戦略的であるかがわかろう。

このように，雑誌名，表紙の絵図，セクションの分けかたなど，表面上は世俗性に固められた雑誌であるが，頁をめくってみれば宗教的な雑誌であることはある程度判断でき，記事の執筆者も読者もこの雑誌が宗教的雑誌であることは認識できたと思われる。その上でインマンは南北アメリカの高名な政治家，知識人を執筆者に選び，様々なテーマに関して記事を書かせるが，宗教に関する記事も多い。執筆者として目に付く人物を列挙してみると，アルゼンチンの社会学者ホセ・インヘニエロス，ペルーの歴史家ビクトル・アンドレス・ベラウンデ，ベネズエラの歴史家ルフィーノ・ブランコ・フォンボーナ，ペルーの政治家ビクトル・ラウル・アヤ・デ・ラ・トレ，チリ臨時大統領となったカルロス・ダビラ，メキシコの思想家アントニオ・カソ，ペルーの思想家ホセ・カルロス・マリアテギ，メキシコの壁画家ディエゴ・リベーラなど，多士済々である。

インマンはこれらの中から 14 人を選び出し，1924 年 10 月，『新しい民主主義』の顧問会議を組織した。そのメンバーも錚々たるもので，ウルグアイ大統領を辞したばかりのバルタサル・ブルムをはじめ，チリの詩人で 1945 年にラテンアメリカ初のノーベル文学賞受賞者となるガブリエラ・ミストラル，ドミニカ共和国の作家トゥリオ・セステーロ，スペインの文

学批評家フェデリーコ・デ・オニス，米国の宣教師ジョン・マッカイ，そしてメキシコからは公教育大臣ホセ・バスコンセロス，人類学局長（後公教育省次官）マヌエル・ガミオ，外務大臣アーロン・サエンスらが加わっている。やはりインマンはメキシコに知人が多く，米国にも隣接するこの国はアメリカの文明的一体化を求める彼にとって特に重要な意味があり，そのことは次の一文からも読み取れる。

> メキシコとその問題は現在この大陸全体にとって重大な関心を引き寄せるテーマである。北の大国の隣国に位置し，スペイン植民地時代よりイベロアメリカの最重要拠点の一つであり，同時にアングロサクソンとラテンアメリカの文明を知り，評価する格好の比較の場でもある。(36)

バスコンセロス，ガミオ，さらに，1924年4月までバスコンセロスの下でメキシコの教育に携わっていたミストラルなど，インマンはメキシコ教育のトップクラスの行政官を動員し，彼らに議論の場を提供していたことになる。その議論も宗教問題を扱っているものが大半である。カトリシズムと物質主義の狭間にあって，メキシコ教育行政官の多くが宗教問題に苦悩しているのを目にしたインマンは，彼らに発言させながら国民統合の手段としての市民宗教論を活性化させ，ひいてはそのまとめ役としてプロテスタンティズムが影響力を発揮する機会を作ろうとしたのである。

## むすびにかえて

以上のように，インマンはアメリカ大陸規模での市民宗教，宗教的パンアメリカニズムを唱え，それらを宣伝する場として『新しい民主主義』を刊行した。そして，ラテンアメリカの為政者，知識人たちもインマンの意向にほぼ沿う形で市民宗教，宗教的パンアメリカニズムを模索する議論を同誌において展開していく。ラテンアメリカの側に市民宗教や宗教的パン

アメリカニズムを受け入れる土壌がある程度整っており，それを巧みに利用しようとしたインマンの方法はプロテスタント宣教戦略としては新しいものであったと言える。

とはいえ，米国プロテスタンティズムの思惑が見え隠れするインマンの考えにラテンアメリカの為政者や知識人がどの程度同調していたかについては，個々の人物を取り上げて慎重に検証していく必要がある。たとえば，インマンの強調点はラテンアメリカをプロテスタント世界に取りこむための南北アメリカの一体化にあったが，多くのラテンアメリカの為政者，知識人が抱いていた第一の関心は各国単位の国民統合であった。両者の間に明らかに関心のずれがあったのである。こういった点については稿を改めて論じていくこととしよう。(37)

**註**

(1) 曽根暁彦『アメリカ教会史』，日本基督教団出版局，1974年，234-238頁；森孝一『宗教から読む「アメリカ」』，講談社，1996年，5-32頁。

(2) 管見では，社会的福音がペルーの教育に及ぼした影響に関して先行研究があるのみである。Rosa del Carmen Bruno-Jofré, ***Methodist Education in Peru : Social Gospel, Politics, and American Ideological and Economic Penetration, 1888-1930,*** Waterloo, Wilfrid Laurier University Press, 1988.

(3) この点に関しても次の研究があるのみ。Robert N. Bellah and Phillip E. Hammond, ***Varieties of Civil Religion,*** San Francisco, Harper & Row, 1980.

(4) Bellah, "Civil Religion in America," ***Daedalus,*** 96-1, 1967, p. 7.（邦訳「アメリカの市民宗教」，河合秀和訳，ベラー『社会変革と宗教倫理』所収，未来社，1973年。ただし，本論での引用は拙訳。）

(5) ***Ibid.,*** pp. 3, 8. ここで言うキリスト教とは事実上プロテスタンティズムのことである。ベラーはケネディの演説に見られる「根本的な宗教的義務に関する非常に実践主義的で非思弁的な捉え方は，歴史的にプロテスタンティズムの立場を想起させる」と述べている。***Ibid.,*** p. 5.

(6) ***Ibid.,*** p. 16.

(7) Bellah and Hammond, ***op. cit.,*** p. xi.

(8) Bellah, "Civil Religion in America," p. 13.

(9) José Casanova, ***Public Religions in the Modern World,*** Chicago, University

of Chicago Press, 1994, p. 60.（邦訳『近代世界の公共宗教』，津城寛文訳，玉川大学出版部，1997年。ただし，本論での引用は拙訳。）

(10) ブッシュ現大統領は就任演説において「教会と愛，シナゴーグとモスクが我々の社会に人間性を与える」という具体的な宗教を想起させる表現を用い，宗教的多様化への配慮を窺わせつつも，歴代大統領と同様に「神」，「信仰」，「祝福」，「召命」，「天使」といった市民宗教的言辞を演説において駆使し，「自由」や「民主主義」に寄与する神的使命が米国に託されていると説く。米国市民宗教は社会の多様化により危機に瀕する一方で，国民統合に向けた役割がいっそう期待され，大統領就任という「国民的儀式」において発露され続けていくのであろう。George W. Bush, "President Bush's Inaugural Address," *The Washington Post,* January 21, 2001, A, p. 23.

(11) Kenneth Flint Woods, "Samuel Guy Inman: His Role in the Evolution of Inter-American Cooperation," Ph. D. Thesis, Washington, The American University, 1962, pp. 12–23.

(12) *Ibid.*, pp. 27–29.

(13) Inman, "Principios que debieran inspirarnos en nuestras relaciones futuras con México," *La Nueva Democracia*（以下 *ND* と略す），febrero de 1921, p. 18.

(14) インマンは特にストロングの社会的福音に感化を受けており，民衆会館も「教会，家庭，学校，鉱山，商店，銀行など，人々のいる所へ行け」というストロングの言葉に従ったものであるという。Deborah J. Baldwin, *Protestants and the Mexican Revolution: Missionaries, Ministers, and Social Change,* Urbana, Chicago, University of Illinois Press, 1990, p. 164.

(15) デイヴィド・バレット編『世界キリスト教百科事典』，竹中正夫ほか訳，教文館，1986年，67頁。

(16) Inman, *Intervention in Mexico,* New York, Association Press, 1919, pp. 3–13.

(17) *Ibid.*, p. 216.

(18) Inman, *Hacia la solidaridad americana,* Madrid, Daniel Jorro, 1924.

(19) Inman, *Problems in Pan Americanism,* London, George Allen & Unwin, 1926, pp. 88–89.

(20) *Ibid.*, pp. 90–91.

(21) *Ibid.*, pp. 91–92.

(22) *Ibid.*, pp. 92–93.

(23) *Ibid.*, p. 425.

(24) *Ibid.*, pp. 93-94.

(25) *Ibid.*, p. 94.

(26) *Ibid.*, p. 95.

(27) *Ibid.*, pp. 95-96.

(28) Inman, "Nuestro saludo y nuestro programa," ***ND***, enero de 1920, p. 1.

(29) *Ibid.*, pp. 1-2.

(30) これに関連して，1923年2月号においてインマンはワシントンを「アメリカ民主主義の数多の英雄の模範」，リンカーンを「歴史に名を残す英雄の如く，その偉業を殉教によって明らかとした」人物，フアレスを「リンカーンに匹敵する人類の救済者」，サルミエントを「公教育の使徒」として，南北アメリカの偉人たちを市民宗教的聖人に祭り上げようとしている。特に後三者は「今日人類がアメリカから来るであろうと待ち焦がれている光輝に満ちた救済の使命を果たす」アメリカ大陸の進路を象徴しているという。Inman, "Nuestro número y nuestra campaña," ***ND***, febrero de 1923, p. 3.

(31) Inman, "Nuestro saludo y nuestro programa," p. 1.

(32) *Ibid.*

(33) *Ibid.*

(34) *Ibid.*

(35) *Ibid.*

(36) Inman, "El presidente mejicano Sr. Obregón y sus problemas," ***ND***, agosto de 1922, p. 21.

(37) バスコンセロスに関しては筆者はすでに論考を発表している。拙論「宇宙的人種の使命—ホセ・バスコンセロスの宗教思想」『宗教研究』328，2001年。バスコンセロスは後に国民統合の原理を再度カトリシズムに求め，インマンと決別して顧問会議も除名となっているが，ここに，結局はカトリシズムに回帰する傾向にあるラテンアメリカ知識人がプロテスタント的市民宗教を受容する限界性を見ることができよう。